奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶に関係する史跡（7）
―奈良市域に存在する茶産地：東市・帯解地域―

About the Tea-related Historical Sites Existing near Nara Saho College
Part 7-Tea Production Center Existing in Nara City：Toichi，Obitoke-

寺田　孝重[1]　　島村　知歩
TERADA Takashige　SHIMAMURA Chiho

キーワード：茶産地，奈良市，東市地域，帯解地域
Key Words：Tea Origin，Nara City，Toichi Area，Obitoke Area

1. はじめに

奈良佐保短期大学（以下，本学）が位置する奈良市域は，日本の文化発祥地であり，文化遺跡が多数存在していることは，周知の事実であり茶に関する文化も例外ではない．その中にあって，前報 [1] では特に茶の生産に関連した史跡を紹介した．本報では，本学近辺で過去には茶の生産をしていながら，現在は茶業の形態が見られなくなってしまった産地について紹介する．

2. 本学近辺の茶業について

奈良市域は，現在では県茶産地の 7 割以上を含んでいる．主な産地については，以後も紹介したいが，本学が位置する東市・帯解地域は，前報 [1] で紹介した本県の主産地である月ヶ瀬・田原に匹敵する茶産地であった．

その後変遷を経て，現在は茶業を見ることはなくなっているが，所々に片鱗が残存しているため，今回は，本学近辺の地域について紹介を行いたい．

前報 [1] 付表 1 より，本学近辺の地域部分を抜き出したものが表 1 である．この表にあるように，東山中への入り口に当たるこの地域には，特に明治 14 年（1881）には茶の生産がなされていたことがわかる．次章では，現在それらの生産地がどのようになっているか詳しく見ていく．

表 1　本学近辺地域における茶産地の動向
（東市村・帯解村部分）

市制施行前（1898 年）		大和国町村誌集（1881 年作成）	
旧郡名	旧町村名	旧村名	茶の産出量
添上	東市村	白毫寺	530 斤
		鹿野園	200 貫
		鉢伏	7 貫
		古市	17500 斤
		横井	95 貫
		藤原	250 貫
		八島	700 貫
	帯解村	今市	660 斤
		山	250 貫
		窪ノ庄	10000 斤
		田中	5625 斤

1 貫＝約 3.75kg，1 斤＝約 600g

3. 現地調査

本学を含め，旧東市村・帯解村の近隣地域丘陵部において，チャ[注 1] の生息実態を調査した．調査地点は，①本学構内の岩井川に面した斜面　②春日苑住宅バス停付近　③円照寺バス停付近　④八島陵遊歩道　⑤円照寺参道　⑥円照寺境内の 6 ケ所である．

3-1 本学構内

本学構内の岩井川に面した斜面は，現在竹林になっているが，中世には第一報で紹介した古市氏の拠点に関係していた場所であり，本学の向かいに位置する奈良県護国神社の敷地に古市氏の支城[注 2] が存在していた．このことと関連は不明ながら，人工的な階段状の地形があり，その周辺に，チャの株が存在

[1] 元奈良佐保短期大学非常勤講師

図 1　本学校内に残るチャの木

図 2　春日苑住宅バス停付近に残るチャとカキ

図 3　円照寺バス停横の放棄園

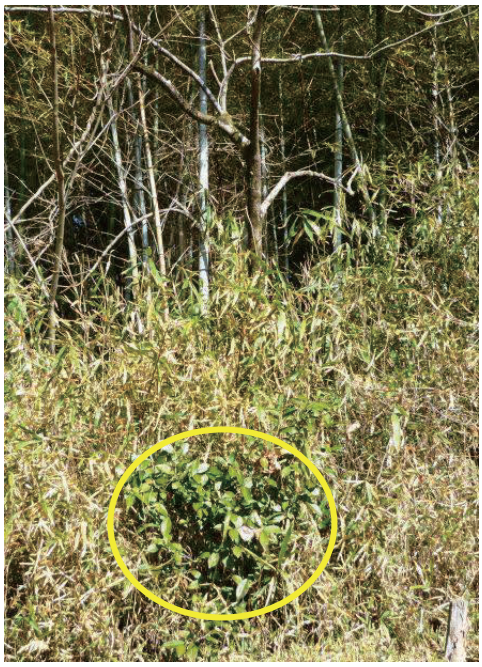

図 4　円照寺参道横のチャの個体

し，図 1 の黄色囲み部分のようにエスケープ[注 3)]と思われる株状の個体が確認された．

3-2 春日苑住宅バス停付近

春日苑住宅バス停横の緩斜面に，茶園が存在する．この園は，株状のチャが列植の状態で現在も残っており，経済園ではないが管理が継続されていると思われる．また，図 2 のようにカキの古木が複数本植栽されており，茶業用の柿渋採取[注 4)]を兼ねた栽培形態は，田原地域の古老から聞いた明治期に行われていた栽培方法に一致する．

3-3 円照寺バス停付近

円照寺バス停横に，篠竹に覆われた放棄園がある．篠竹の中を見ると，チャの列植された痕跡が明瞭に認められた．この園にもカキの古木が認められる．

近隣の方への聞き取りでは，昭和 40 年ごろまでは，一応管理された茶園であったが，その頃から管理されなくなった様子である（図 3）．

3-4 八島陵遊歩道

円照寺参道より崇道天皇八島陵へ向かう山林中の遊歩道周辺に，かつては列植されていたことを思わせるチャの個体が黄色で囲んだ部分のように存在し

図 5　円照寺参道横のチャの株

図 6　円照寺裏山に見られるチャの個体

図 7　円照寺庭園にあるチャの個体

ている．現在はスギ・ヒノキ林や竹林となっているが，細道の両側にかなりの密度で生息している．この箇所にもカキの古木がわずかながら認められる（図 4）．

3-5 円照寺参道

円照寺への参道は，切通し[注 5)]に近い形になっており，この斜面に生育するチャ株は，エスケープかもしれないが，かつてはこの部分にも茶園が存在していた可能性は十分に考えられる（図 5）．

3-6 円照寺域

円照寺の寺域から裏山にかけて，列植されていたと思われるチャの個体（図 6）が認められる．寺の庭園にあるチャの個体（図 7）は園芸的な植栽かもしれないが，かつて植栽されていたものを意匠的に残した可能性もある．庭を管理されていた方々は，記憶にないとの事であった．

4. 地図による調査

4-1 東市地域

本学が立地している奈良市鹿野園町や隣接する古市町は，明治期には添上郡東市村と呼ばれていた．この地域は，前報で紹介した田原地域へ向かう奈良からの道の入口付近の丘陵斜面にあたり，中世には，前述のように豪族古市氏の本拠地として開けた地域で，野登川，岩井川が流下しており，奈良町としては水利の重要拠点であった．

図 8 は，当該地域の明治 41（1908）年の地形図と現在のものを並べたものである．明治 41（1908）年の地図には，水田と緩傾斜面が混在しており，この傾斜面の丸で囲んだ部分に茶園のマーク（ ∴ ）が多くみられる．しかし，現在の地図には，鹿野園町に丸で囲んだ部分の 1 ヶ所のみに茶園のマークが存在していることが確認できる．

明治 14 年（1881）の調査を資料として作成された『大和国町村誌集』に，表 1 の産出量がみられることから，これらの傾斜面が茶栽培に適しているため，明治初期から茶生産が始まったと推定される．

これらのことから，3-1 のように岩井川に面した竹林の中や 3-2 のような形態で，この地域に茶栽培の痕跡とエスケープ個体と思われるチャ株が確認されるのは，当然のことであり，さらに調査すれば残存茶園は見出しうるものと考えている．

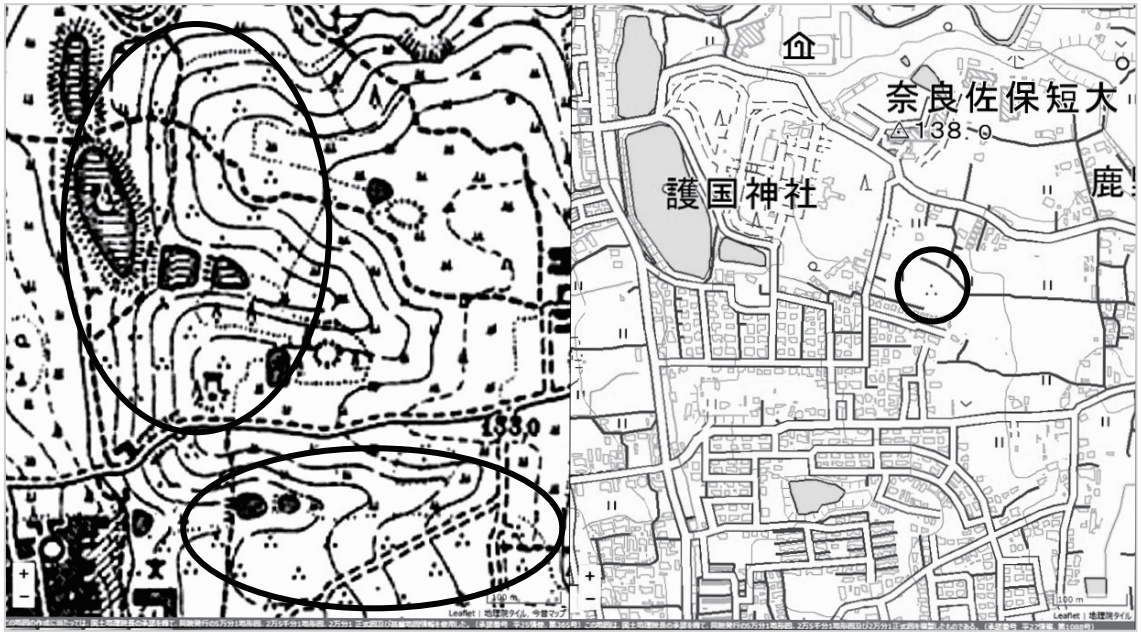

図 8　明治 41 年測図（左側）と現在（右側）の古市地区および本学周辺地図[注 6)]

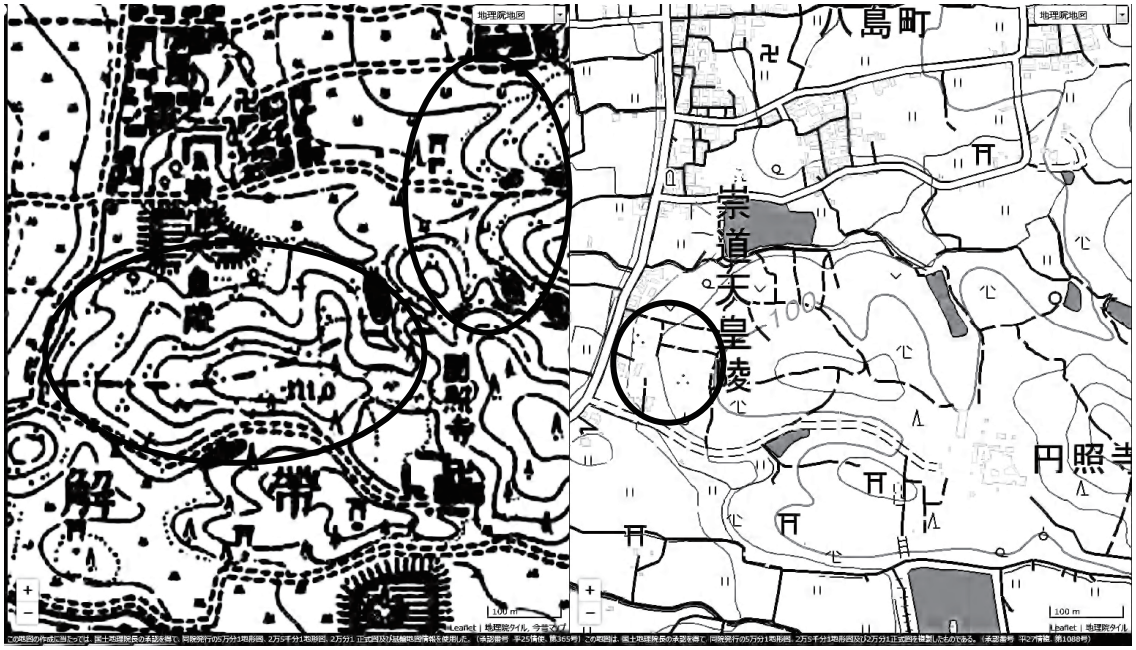

図 9　明治 41 年測図（左側）と現在（右側）の山村円照寺近辺地図[注 6)]

この地域の明治期の農産物を『大和国町村誌集』[2)] で見ると，東市村古市としては茶の他に「米，麦，小麦，菜種，實綿，豌豆，大豆，小豆」が記されており，奈良県の代表的な物産でもあるこれらが，この地域の代表的な物産であったと考えられる．

4-2 帯解地域

現地調査で，茶園の痕跡が検出された山村を含む帯解地区は，東市地域の南に隣接し，地形的にも良く似ているが，さらに南下して五ケ谷地域に向かうと，山がさらに深くなる傾向がある．

図 9 は，図 8 と同様に明治 41（1908）年と現在を比較したものであるが，明治期には円照寺をはさんで，山中の丸で囲んだ部分に広範な茶園のマークが認められる．円照寺は，東市村八島に設立されその後寛文 9（1669）年に現在の場所に移転したものである．

一方，現在の地図には，同じ地点に茶園のマークが印されておらず，宅地化が進んでいるものとみられる．ただ，丸で囲んだ円照寺参道付近に 2 か所の茶園マークがあり，今回

の調査で認められた痕跡は，それぞれ近い場所にあると考えられる．

大正 14（1925）年に奈良県で全国茶品評会が開催された時に，記念誌として上梓された『大和茗華』[3] には多数の広告が掲載され，当時の茶業の賑わいを反映している．これに帯解村からは 4 点の茶問屋・茶商・製茶販売に関する広告が掲載されているが，東市地区からの広告が見られないことから，その後の茶業の進展には差があったのではないかと思われる．

5. おわりに

今回紹介した地域は，現在では茶の生産がほとんど認められなくなっている．しかし，今回のように，当該地域も少し発掘すると，このような茶に関する事績が判明してくる．奈良の気候において，チャはエスケープしやすい作物であり，また活着すると根を深く張るので，長く生存が可能となる．このような様子が畦畔，庭先や山林に認められる所は，かつての茶業を考えられる地域であり，この地だけでなく，学生諸君の故郷でも観察してもらいたいと思う．

注釈

注 1）学術的に動植物はカタカナ表記が通例であるため，本報ではチャノキを「チャ」，カキノキを「カキ」と表記している．

注 2）護国神社鳥居の近くに「戦国時代の古市氏の油山城址」と記された案内柱がある．油山城は古市城（現在の東市小学校付近）の支城である．

注 3）もとは栽培されていたものが，栽培地近辺に逃げ出して自生しているものをさす．

注 4）茶と柿の農作業の繁忙期の違いを利用して一緒に生産している農家が多かった．ここでいう柿は食用ではなく，防水塗料としての柿渋生産のための渋柿で，製茶道具の塗料などに使うほか，茶壺に封をする和紙や茶袋を防水加工するために柿渋を使った．

注 5）山や丘などを切り開いて，通された道で，道の両側は急斜面になっている [4]．

注 6）この地図は，時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」[5]（(C)谷　謙二）により作成したものである．埼玉大学教育学部の谷謙二氏が作成した「今昔マップ on the web」は，明治から平成に作成された旧版地図と国土地理院の電子国土 Web システムから配信されている地図を並列表示することができるソフトである．

引用・参考文献

1）寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について（6）」，『奈良佐保短期大学研究紀要』，25，pp.49-56（2017）

2）川井景一選編：『大和国町村誌集　15 巻 1 添上郡 』，pp.45-46（1891），http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/993077（2018.11.30）

3）池田幸太郎編纂：『大和茗華』，奈良縣茶業組合聯合會議所（1925）

4）「切通し」日本国語大辞典，Japan Knowledge，https://japanknowledge.com（2018.11.30）

5）埼玉大学教育学部谷謙二研究室：時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」，http://ktgis.net/kjmapw/（2018.11.30）